

## ナーラーヤナによる 『クマーラサンバヴァ』第一章第三詩節の修辞法解釈

本田義央

### 0. はじめに

本稿は、カーリダーサの作品『クマーラサンバヴァ』(Kumārasambhava、略号KS) 第一章第三詩節における修辞法の、ナーラーヤナ・パンディタ(Nārāyaṇa Paṇḍita、十七世紀中頃、以下「ナーラーヤナ」)の注釈『ヴィヴァラナ』(Vivarāna)による解釈を検討し、その特徴を探ることを目的とする。

### 1. 『クマーラサンバヴァ』第一章第三詩節

『クマーラサンバヴァ』第一章第三詩節は次の通りである。

KS 1. 3: anantaratnaprabhavasya yasya  
himaṁ na saubhāgyavilopi jātam /  
eko hi doṣo guṇasannipāte  
nimajjatīndoh kiraṇeṣv ivāṅkaḥ //  
「[それぞれの種類のもののうちの] 最高のものを限りなく産出するそれ(ヒマヴァット)にとって、雪は[その]魅力を損なうものとはならなかった。よく知られているように、単独の欠点というものは[多くの]長所の集合に沈みこみ[かくれてしまう]。月の光のなかに[月の欠点である]斑点が沈みこむように。」

この詩節の主題は、詩節前半で述べられている、ヒマヴァットが最高のものを無限に産出するものであり、欠点である雪はそのようなヒマヴァットの魅力を減じるものではない、ということである。そして、その主題として述べられたことを裏付け確認するために、主題に対応する一般的な事柄として、欠点がひとつあっても多くの長所があればその欠点は長所の中に没して見えることはない、ということがいわれている。

る。そしてこの詩節では、さらに続いて、月には斑点という欠点があるが、明々と月が輝いていればその輝きに斑点はかくれて、それをわれわれが見ることはないのと同じように長所が多くあれば欠点はみえない、というように比喻によってさらに説明を加えている。詩節のこのような基本的な構造については、注釈者の見解も一致するところである。意見がわかれるのは、最後の比喻の果たす役割についてである。<sup>1</sup>

### 2. マッリナータの解釈

カーリダーサのマハーカーヴィヤに対する標準的な注釈家と見なされるマッリナータ(Mallinātha、十四世紀頃)の解釈を見ておこう。マッリナータは、同詩節に対する注釈において、次のように述べる。

Sañjīvanī on KS 1. 3: atropamānuprāṇito  
'rthāntaranyāsālakārah / tallakṣaṇam tu jñeyah  
so 'rthāntaranyāso vastu prastutya kimcana /  
tatsādhanasamarthasya nyāso yo 'nyasya  
vastunaḥ // iti daṇḍī /

この詩節では、upamāによって補助された(anuprāṇita) arthāntaranyāsa(「他の事柄の提示」という修辞法が用いられている。そしてその特徴はダンディンによって次のようにいわれている。「ある[主題である]事柄をとりあげて、それを成立させることのできる他の事柄を提示することが arthāntaranyāsa [という修辞法]で

<sup>1</sup> 『クマーラサンバヴァ』に対するその著作が現存する最初の注釈家はヴァッラバデーヴァ(Vallabhadeva、十世紀頃)であるが、本稿がとりあげる詩節の修辞法について彼は触れていない。

あると知らねばならない」(*Kāvyaḍarśa* 2.168)

ここで、マッリナータによれば、月光と斑点の *upamā* は、*arthāntaranyāsa* を補助するものである。補助されているにせよ、修辭法としては *arthāntaranyāsa* である。

### 3. 1. ナーラーヤナの第一解釈

ナーラーヤナは、この詩節における修辭について、二つの解釈を提示している。まずはじめはこの詩節における修辭を *saṃsr̥ṣṭi* (「共存」) とする解釈である。*saṃsr̥ṣṭi* について彼は『アランカーラサルヴァスヴァ』(*Alaṃkārasarvasva*) 85 をその特徴を述べるものとしてあげている。すなわち、胡麻と米がまざった場合のように複数の修辭がそれぞれの独立性を保ったうえで一つの詩節に同時にある場合が *saṃsr̥ṣṭi* にあたる。

Vivaraṇa on KS 1.3: atra eko hi doṣa ity atra viśeṣasya sāmānyena samarthanād arthāntaranyāsaḥ / sāmānyam vā viśeṣo vā tadanyena samarthate / yatra<sup>2</sup> so 'rthāntaranyāsaḥ sādharmyeṇetareṇa vā // iti tasya lakṣaṇam / indoḥ kiraṇeṣv ivāṅka ity atra upamā / sādharmyam upamā bheda iti tallakṣaṇam / atra tu tayoh saṃyogarūpeṇāvasthānāt saṃsr̥ṣṭir alaṅkāraḥ / eṣāṃ tilataṇḍulanyāyena miśratve saṃsr̥ṣṭiḥ iti tallakṣaṇam /

この詩節中の「よく知られているように、単独の欠点は」(*eko hi doṣaḥ*) というこの箇所において、[ヒマヴァットにある欠点である雪が多くの中所に隠れるという] 特定の事柄が一般的な事柄によって確証されているから、*arthāntaranyāsa* [がここでは使用されている]。その特徴は [次の通りである]。「一般的な事柄あるいは特定の事柄が、それら [の一方が] 他方によって、共通性あるいは逆 [つまり非共通性] によって確証される場合、それが *arthāntaranyāsa* である。」(*Kāvyaḍarśa* sū. 165)。月の光に [月の] 斑点が [沈み込む] ように」という箇所では *upamā* が使用されている。その特徴は「[比喩基準と比喩対象が] 別であるとき、それら両者の共通の属性との結合が *upamā* である」(*Kāvyaḍarśa* sū. 125) である。そして、ここでは [*arthāntaranyāsa*

と *upamā* という] 両者は結合して存立しているから、*saṃsr̥ṣṭi* という修辭である。その特徴は「これら [の修辭] が胡麻と米 [が混ざるとき] やりかたで混ざるとき *saṃsr̥ṣṭi* [という修辭] がある」(*Alaṃkārasarvasva* 85) [とルツヤカによっていわれている]。

### 3. 2. ナーラーヤナの第二解釈

ナーラーヤナは、目下の詩節における修辭を *saṃsr̥ṣṭi* とする上の解釈に続いて、「実際には」とのべて、*saṃsr̥ṣṭi* ではなく *vikasvara* (「拡張」という修辭であるという。すなわち、ナーラーヤナは次のようにいう。

Vivaraṇa on KS 1.3: vastutas tu vikasvarāṅkāra eva / yatra kasyacid viśeṣasya samarthanārtham sāmānyam vinyasya tatprasiddhāv apy aparituṣyatā kavinaḥ tatsamarthanāya punar viśeṣāntaram upamārityā arthāntaranyāsaividhayā vā vinyasyate, tatra vikasvarāṅkāraḥ / yasmin viśeṣasāmānyaviśeṣāḥ sa vikasvaraḥ iti ca tallakṣaṇam //

しかし、[この詩節における修辭法は] 実際には *vikasvara* という修辭に他ならない。ある特定の事柄を確証するために、一般的な事柄を提示して、そ [の提示した一般的な事柄] が世間でよく知られていることであるとしても、詩人は [それに] 満足しないならば、[その一般的な事柄を] 確証するために、*upamā* というやりかたによって、あるいは *arthāntaranyāsa* というやり方によって、さらに別の特定の事柄を提示する。そこに *vikasvara* という修辭がある。そして「特定の事柄、一般的な事柄、[さらに] 特定の事柄があるところ、それが *vikasvara* である」(*Kuvalayānanda* v. 123) というのがその特徴である。

ナーラーヤナが目下の詩節における修辭法であるという *vikasvara* は、ひとつの修辭法として認められることの少ない修辭法である。Gerow(1971, 335)がいうように、*arthāntaranyāsa* の一種とされることが多く、また、マンマタ以後にあらわれる網羅的な修辭学書においてとりあげられるものである。*vikasvara* を独立した修辭法としてあげるのはジャヤデーヴァ (*Jayadeva*、十三世紀頃) の『チャンドラ・アローカ』(*Candrāloka*)、そして本来それに対する

<sup>2</sup>KP: yat tu.

注釈であったアッパヤディークシタ (Appayadīkṣita, ca. 1520–1593) の『クヴァラヤ・アーナンダ』(Kūvalayānanda) であるが、上のナーラーヤナ注の引用箇所は、全体が実は vikasvara をとりあげた『クヴァラヤ・アーナンダ』第 61 節からの借用であり、さらに本稿で取り上げているカーリダーサの詩節がそこでの作例として取り上げられている。このことから、ナーラーヤナが目下の詩節の修辭解釈についてはアッパヤディークシタに依拠しているといつてよいであろう。アッパヤディークシタはタミル、ナーラーヤナはケーララといずれも南インドでおよそ百年ほどの時間をはさんで活動した学者である。『クヴァラヤ・アーナンダ』は広く普及したから、それに応じてナーラーヤナは同書のカーリダーサの修辭法解釈を取り入れたのであろう。

## 5. まとめ

ナーラーヤナの『ヴィヴァラナ』注は、時に異論をはさみながらも、彼に先行する注釈者であるアルナギリナータ (Aruṇagirinātha) の注釈『プラカーシカー』(Prakāśikā) におおきく依っている。しかし、この詩節に対する注釈でアルナギリナータは修辭法 vikasvara には言及しない。この解釈は、ナーラーヤナがアッパヤディークシタの著作から自己のカーリダーサの修辭解釈として取り入れたものである。

## 略号及び参考文献

*Alaṃkārasarvasva of Rājānaka Ruyyaka*. R. P. Dwivedī, ed. Varanasi: Chaukhambha Sanskrit Series Sansthan, 2002.

*Kāvya prakāśa of Mammaṭa*. V.R. Jhalakikar, ed. Poona: BORI, 1983. (KP)

*Kāvya darśa of Daṇḍin*. R.R. Shastri, ed. Poona: BORI, 1970.

*Kūvalayānanda of Śrīmad Appayadīkṣita*. J.S. Tripathi, ed. Chowkhamba Sanskrit Series 121. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 2006.

*Kumārasambhava of Kālidāsa* (KS):

(1) *The Kumārasambhava of Kālidāsa with the Two Commentaries, Prakāśikā of Aruṇagirinātha*

*and Vivaraṇa of Nārāyaṇa of Nārāyaṇapaṇḍita*. Gaṇapati Śāstrī, ed. 3 vols. Trivandrum Sanskrit Series 27, 32, 36. Trivandrum, 1913–14.

(2) *Kumārasambhavamahākāvyaṃ of Mahākavi Kālidāsa*. R. Dwivedī, ed. Sarasvatībhavana Granthamālā 148. Varanasi, 2004.

Cahill, T.C. 2001. *An Annotated Bibliography of the Alaṃkārasāstra*. Leiden: Brill.

Gerow, E. 1977. *Indian Poetics*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

本田義央 2009 「ナーラーヤナ・パンディタについて」『比較論理学研究』6: 41-44.

(ほんだ よしちか 広島大学 [インド哲学])